

P2-046

肥満児の体格面の経時的变化の検討
— 肥満判定には体組成も測定する必要がある —伊東 良介¹、横山 美佐子²、伊東 真理³、
田久保 由美子⁵、加藤 チイ⁶、田久保 憲行⁴¹北里大学大学院医療系研究科²北里大学医療衛生学部 リハビリテーション学科³医療法人社団 徳寿会 田名老人保健施設光生 リハビリテーション科⁴順天堂大学医学部 小児科学講座⁵東京医療保健大学千葉看護学部⁶実践女子大学生生活科学部 食生活科学科

【背景・目的】

本邦における小児期の肥満は、年齢、性別、身長別の標準体重から算出される肥満度を用い、肥満度20%以上30%未満を軽度肥満、肥満度30%以上50%未満を中等度肥満、肥満度50%以上を高度肥満と判定している通り、体格評価は、身長と体重のみが用いられている。我々は、6年前より多職種協働の肥満改善プログラムを実施しており、A市内の病院、あるいはA市児童生徒肥満健診事業で中等度以上の肥満と判定された児が本プログラムへ紹介される。今回我々は、本プログラムに長期間参加している児に着目し、肥満児の体格面の経時的な変化を調査したので、その結果を報告する。

【方法】

対象は、多職種協働の肥満改善プログラムに3年以上参加している肥満児2名(5年生の高度肥満男児1名、5年生の中等度肥満男児1名)とした。本プログラムは月に2回行っており、毎回、開始前の身長、体重、肥満度、体脂肪率および筋肉量を測定した。測定には、自動身長計付き体組成計DC-250(TANITA社)を用いた。なお本研究は、北里大学医学部・病院倫理委員会の承認を受けている。

【結果】

高度肥満児のプログラム参加期間は5年6ヶ月で、身長は113.6cmから146.2cmへと32.6cm増加し、体重は32.4kgから69.5kgへと37.1kg増加し、肥満度は60.8%から76.0%へと15.2%増加した。また、体脂肪率は48.4%から67.4%へと19%増加し、筋肉量は16.0kgから21.7kgへと5.7kg増加した。中等度肥満児のプログラム参加期間は3年9ヶ月で、身長は122.2cmから144.0cmへと19.8cm増加し、体重は31.0kgから48.6kgへと17.6kg増加し、肥満度は30.2%から29.6%へと0.6%減少した。また、体脂肪率は28.0%から31.6%へと3.6%増加し、筋肉量は21.3kgから31.5kgへと10.2kg増加した。肥満児2名の体脂肪率および筋肉量は、身長や体重と異なり肥満改善プログラム期間中に繰り返し増減が認められた。

【考察】

高度肥満児の体重増加は、筋肉量の増加と比べて体脂肪の増加が強く影響しているものと考えられる。一方、中等度肥満児の体重増加は、筋肉量の増加が強く影響しているものと考えられる。肥満児2名はどちらも体重増加を認めたが、それぞれの体組成変化は異なっているため、小児期の肥満は、身長と体重で判定する肥満度だけではなく、体組成も測定したうえで肥満の質を判断する必要があるものと考えられる。なお本研究は、JSPS科研費JP17K01869の助成を受けて実施した。

P2-047

保育士養成課程における児童虐待教育のレディネス(第2報)

廣金 和枝

畿央大学健康科学部 看護医療学科

【目的】

保育士養成課程学生の入学直後における児童虐待教育のレディネスを明らかにし、児童虐待教育の教育内容について検討することを目的とする。

【方法】

関西A大学の保育士養成課程に入学した学生87名に自記式質問紙調査を行い、有効回答84名(有効回答率96.5%)について分析を行った。身体の正面図および背面図の2つの身体図を提示し「虐待によってできるけが多いと思う部位」について、正面図、背面図それぞれについて斜線を描くとともに、その部位名についても記載を求めた。正答は、JA. Monteleone(1998)が示した部位とした。また、児童虐待の定義、虐待の種別の説明に用いられる事例および高橋ら(1996)が用いた項目を参考に、虐待に関する想定事例文(ビネット)20項目を作成し、それぞれについて「虐待だと思う」、「不適切だが虐待ではない」、「虐待だと思わない」、「わからない」で回答を求めた。入学前の児童虐待の学習経験の有無とそれぞれの回答傾向について、カイ2乗検定で解析を行った。

【結果】

児童虐待に関する学習経験のあるものは27名(32.1%)、学習経験のないものは57名(67.9%)であった。虐待によるけがの部位は、正面図の正答率は、首6.0%であり、耳、脇下、股、内腿について回答できたものはいなかった。一方、背面図の正答率は、背中92.9%、臀部17.9%、首6.0%であり、内腿については回答できたものはいなかった。ビネットの正答率は、身体的虐待4項目63.1~89.3%、ネグレクト7項目22.6~91.7%、心理的虐待6項目44.0~83.3%、性的虐待3項目90.5~100%であった。「虐待だと思わない」と回答した割合が最も高かった項目は、「夜、乳幼児を寝かしつけてから夫婦で遊びに出かける」6.0%であり、「虐待だと思う」と回答した割合は22.6%に留まっていた。これらの傾向に学習経験の有無との関連は認められなかった。

【考察】

虐待による特徴的なけがの部位を、多くの学生は回答することができなかった。また、ビネットは、特にネグレクト項目について正しく判断できる学生の割合が低い傾向が認められた。これらが学習経験の有無で相違がなかったことから、学習経験の有無に依らず、これらの修得を図る教授を行う必要性が示唆された。